

千葉経済大学短期大学部
研究紀要 第5号 99～104 (2009)
授業研究

平和をつくる授業の試み

～「総合演習Ⅱ（エ）」より～

佐久間 美 羊

Pedagogy of making peace ～ the attempts of “Comprehensive seminar Ⅱ”～

Miyo SAKUMA

1 はじめに

平成18年度から3年間に渡り、「総合演習Ⅱ」（2年次後期1単位）の授業の中で平和と紛争（対立）学¹を受け持った。短期大学生活最後の学期での授業となる「総合演習Ⅱ」は、2年間の学びが総括されるよう求められている科目である。今まで大学で学んだ理論や実習で得た経験を活かし、暴力・対立・平和に関する諸問題を学生が実践的に学べるよう努めてきた。本稿では主に20年度に行われた「総合演習Ⅱ（エ）」のケースを用い、平和をつくる授業の試みを振り返り、今後の課題を検討していきたい。

2 「平和教育」を巡る動き

抽象的で学問の対象として考えてこれなかった「平和」を科学的な学問として体系化したのはヨハン・ガルトゥングである。ガルトゥングは「現実における身体的・精神的（自己）実現が、その潜在的実現以下であるような影響を受けているならば、そこには暴力が存在する」²と定義し、身体的な暴力（直接的暴力）のみならず、社会構造の中に組み込まれている不平等なシステム（構造的暴力）やそれらを正当化する価値観（文化的暴力）も暴力と捉えた。この3つの暴力は直接的暴力を頂点とする氷山にも例えられ、仮に直接的暴力が排除されたとしても、その根底にある構造的・文化的暴力が続く限り直接的暴力は繰り返される。直接的暴力がない状態は「消極的平和」でしかなく、直接的・構造的・文化的暴力の全てがない状態が「積極的平和」であると提起した。

日本の平和教育は1970年代以降広島・長崎を中心とする原爆教育・反戦教育として発展を遂げる。しかしそれは、主として戦争に代表される直接的暴力がない状態＝消極的平和を教える教育であったと言える。一方、1990年代から2000年代にかけて開発教育や、アメリカ・

コロンビアティーチャーズカレッジによる包括的平和教育が導入され、直接的暴力のみならず、貧困や差別問題等の構造的・文化的暴力に取り組む積極的平和を教える教育も取り入れられつつある。³

国際的な動きとしては、1999年に国連総会決議で「平和の文化に関する宣言」が採択された。非暴力、人権、平等、正義といった価値観、態度、行動の伝統や様式、生き方のひとまとまりを平和の文化とし、第4条では「あらゆるレベルの教育は平和の文化を建設する主要な手段のひとつである」⁴（下線部は筆者による）と謳っている。その宣言を受け、世界的なネットワークでの活動が2010年まで展開されることになっている。また、1999年には、100カ国以上から約1万人の市民社会、政府、国際機関の代表者が一堂に集まり、史上最大の国際平和会議（ハーグ平和アピール会議）を開いた。その50項からなる「21世紀の平和と正義のためのハーグ・アジェンダ」の勧告1では「平和・人権・民主主義のための教育をすすめる」⁵ことが盛り込まれ、「私たちの社会に浸透している暴力の文化に立ち向かうために、次の世代は現在とは根本的に異なる教育を受けるのがふさわしい——即ち戦争を美化する教育ではなく平和、非暴力、国際協調を教える教育を。」と付記されている。

このように、平和教育の転換と促進が求められているにもかかわらず、日本において平和学や平和と紛争学を専門に学ぶことのできる高等教育機関はなく、組織だった平和教育学も確立されていない。研究者の多くが海外へ留学し、かの地での学びを日本で実践しているのが現状と言えよう。⁶

このような動きの中で筆者は、「消極的平和を教える平和教育」、或いは「積極的平和を教える平和教育」に留まらず、アリシア・カベスードが提唱する「平和の文化を教えるための実践的教育としての平和教育」⁷という見解に基づき、本授業でもその実践を目指してい

る。つまり積極的平和について教える（内容）だけではなく、平和について教える行為自体（方法）が平和教育の実践であり、その営みから平和を作り出していく必要があるという考えである。

次項では、この考えに基づいた「総合演習Ⅱ（エ）」の授業実践について詳しく考察する。

3 授業の実際

〈本授業の目的〉

「平和学習なんて、沖縄戦のビデオを観て講演を聞く、のワンパターン。毎年そのくりかえし。もう飽きたから眠ってる。」

「現状は平和教育じゃなくて、戦争見学教育。ただ戦争を悪く言ってるにすぎない。そこから先が大事なんだ。」⁸

『平和は「退屈」ですか』（下鴨哲朗著）で吐露される上記の沖縄の現役高校生の声は、既存の平和教育の閉塞感を物語っている。知識の流し込みで、平和を自らつくりだす姿勢・態度の育成、そのための技術習得の訓練が充分なされていないのではないか。

本授業では、平和をつくる実践者に学生を育成することを目指した。受け身の「平和教育」ではなく、一人一人が平和をつくる可能性を自ら見出せるような環境づくり及びカリキュラムづくりを行った。テーマとしては、平和と紛争学という本授業の内容から、1暴力の理解・客観的分析、2対立の解決、3平和の価値の発信を掲げた。言いかえれば、それぞれ平和をつくるための知識・技術・態度に相当する。

〈学生の属性〉

「総合演習Ⅱ」は平成18年度は8クラス、19、20年度は4クラスから学生が選ぶ希望選択制である。筆者担当授業の履修者は毎年30人前後である。履修理由としては、授業内容に即して選択した者が多くを占める。中には、「友人に誘われた」、「担当教員で選んだ」等の理由で受講を選択する者もいるが、概ね、なんらかのポジティブな側面を本授業に見出して臨んでおり、本学の学生における平和についての関心はある程度あると読みとれる。

〈第1週目の授業から〉

本授業は1年半慣れ親しんだ必修クラスとは異なるメ

ンバーで構成され、学生は緊張と不安を抱え教室に集まってくる。前述のように、筆者は平和について教える行為自体が平和教育の実践と考えており、この「不穏」な心の状態を「安心」へと変えることが第一に必要なとなってくる。

まずは、机をコの字型に並び替え、お互いの顔が見える配置にする。互いに背中を向き合っている、或いは誰かが誰かの背中を見つめているだけでは友好的な関係は築けないからである。そして、自己紹介をし合い、「あの人はこんなことを考えているんだ」、と互いに分かり合うことで安心感、つまり心の平安（peace of mind）を得ることができる。自己紹介は「3つの窓でこんにちわ」という方法を採用している。A3用紙に3つの窓を書き、以下の3つの質問に対する答えを書いてもらう。（【資料1】参照）

質問①：自分の名前の頭文字から始まるポジティブな形容。（例：最後まであきらめない佐久間です。）

質問①～③の中で一番時間がかかるのがこの質問のようであり、なかなか自分の長所を見出すことができない、或いは他者へ自己アピールすることを躊躇う学生が多い。しかし、まずは自己肯定感を高め、さらに他者の良い面を見る、というのは友好的な関係を作るのに重要であると考ええる。

質問②：受講理由/この授業で何を学びたいか。

質問③：小学生・中学生・高校生の時に（自分が思う）「平和教育」というものを受けたことがあるか。あるなら、どういうものであったか。何を学んだか。

この時点では「平和教育」とはこういうものだ、という説明は加えず、あくまでも、学生自身が考える「平和教育」で書かせている。しかし、学生の回答にはやはり上記の反戦教育に関するイメージが強い。沖縄・長崎・広島への修学旅行に見られる特別活動としての平和教育、社会（歴史）の教科授業でのそれが大半をしめる。自分が「けんかをした時先生に殴られて平和について考えた」や、道徳或いはホームルームでイジメ問題について考えた（平成19年度）という意見も稀ではあるがあることはある。しかし「覚えていない」という回答やどの戦争か詳しく説明ができない様子を見ると、平和教育を「やった」「行った」ものの、学生

に何が残ったかについては疑問点が残る。

一方で、学生は今までと同じような平和教育を求めているのではないことが質問に対する回答からわかる。前述のように本授業を積極的に選択し、身近で実践的な平和についての学びを求めていることが窺える。

質問②③により、学生は自分の今までの経験を振り返り、何が理解できていてこれから何が必要なのかを学生自身の中で再確認することとなる。それと同時に、教員や他の受講者にも各々のバックグラウンドが伝わり、殊に教員にとっては学生が求めていることを知ることでその後の授業の組み立ての一助となっている。

このように、「心の平安」を目指す環境づくり、そして互いの理解を深めてから本授業はスタートとなる。

〈カリキュラム〉

カリキュラムは、平和をつくる主体的な人間として学生に身につけさせたい総合的な能力を設定し、それらが、暴力の理解、対立の解決、平和の価値の発信と

いうテーマを通して培われるものになっている。（【表1】参照）

また、毎回の授業後に学生にリアクションペーパーを配布し、その時間の授業を振り返り、自分が学んだこと、感じたこと、疑問に思ったことを自由に書いてもらった。時には教員が題目を設定し、それに対する回答を求めた。学生にとって、授業で学んだことを自分なりに整理・熟考する機会になるだけでなく、教員も学生がどれだけ授業を理解したか把握することができた。次の週には、匿名で抜粋したプリントを教員からのコメントも加えて配布した。前回の復習になるだけでなく、他の受講者が同じ授業でどのような意見を持ったかを知ることにもなり、新たな学びの側面を提示することができると考えている。また、個々人のリアクションペーパーのファイルを作ることにより、学期が進むに連れ学生がどのように変容しているのかも見えてくる。

授業形態は、学期の前半は講義やグループワークを

【表1】「総合演習Ⅱ（エ）」カリキュラム

週	テーマ	授業内容	目 標									
			コミュニケーション能力	リサーチ能力	読解力	知識の獲得	表現力	自己観察力	共感性の涵養	多様性の受容	創造力	想像力
1		イントロダクション	自己紹介「3つの窓でこんにちは」				○	○				
2		対立の理解	講義			○						
3		暴力の理解	講義			○						
4	暴力の理解	新聞から見る日常の暴力	1週間分の暴力の新聞記事を持ち寄り、誰から誰への、どこで起こっているどのような暴力で、その背景は何か、なぜその暴力は起きたのか、自分とはどのような関わりがあるか、といった観点で分析する。（参考：ベティ・リアドン、アリシア・カベスド、『戦争をなくすための平和教育』、明石書店、2005）	○	○	○	○					
5	平和の価値	平和とは何か	ウェビングの手法をとり、グループごとに「平和」から連想する事柄やキーワードを次々と書き加える。	○						○		○
6		ピースメーカー①	平和をつくる実践者（ピースメーカー）を一人選び調査し、次週以降に個人発表をする。（参考：ベティ・リアドン、アリシア・カベスド、『戦争をなくすための平和教育』、明石書店、2005）		○		○	○				
7		ピースメーカー②ビデオ	第33回日本賞受賞「声を上げて世界を変えよう」（原題Make Some Noise。オムニ・フィルム・プロダクションおよびカナダ放送協会制作）の視聴。									
8	対立の解決	トランセンド法	1つのオレンジの前に2人の子供が通らなかった、という対立状況を設定し、起こりうる選択肢を思いっただけ書く。その後、それらの選択肢をトランセンド法で分析する。（参考：ヨハン・ガルトウング、『平和的手段による紛争の転換—超越法』、平和文化、2000）	○							○	○
9		私メッセージ	「私メッセージ」と「あなたメッセージ」を比較し、対立の際の効果的なコミュニケーション方法をロールプレイを通して考える。（参考：ERIC国際理解教育センター編「わたしとあなたとみんなのできるワークシート」、ERIC国際理解教育センター）					○	○	○		○
10	平和の価値の発信	平和と芸術	「ピースアート」ポスター展（2003年1月24日～30日に東京国際フォーラムEギャラリーにて開催）の作品鑑賞を行う。自分に一番訴えかける絵を選び、グループごとに何を感じたか、アーティストのメッセージは何だと思うか、平和と芸術の関係を考える。							○		○
11		ストーリー作り	一人一人の宝物についてグループ内で発表し、全員の宝物全てを使い平和についての子ども向け物語を作る。完成後に、子どもがいると想定し読み聞かせをする。（参考：ベティ・リアドン、アリシア・カベスド、『戦争をなくすための平和教育』、明石書店、2005）	○				○	○	○	○	
12		平和教育	「平和教育」という4文字に隠れている言葉、省略されている言葉は何だろうか？									
13		プロジェクト準備		○							○	○
14		プロジェクト					○					
15		まとめ										

中心とし、後半3分の1に差しかかると、自分たちでのプロジェクトを課した。カナダの若者による平和への取組みを扱ったビデオ、「声を上げて世界を変えよう」の視聴（7週目）辺りから、「自分も何かやりたい」という声がリアクションペーパーの中で書かれ始めた。教員がプロジェクトとして与えたテーマは「総合演習Ⅱ（エ）、そして2年に渡る本学での学びを踏まえ、学校や地域、家庭で平和を創るための具体的なプロジェクトを企画・実行する」というものである。

〈プロジェクトづくりと学生の変容〉

プロジェクトの計画段階になると、教員は一線を離れ、話し合いの主導を学生に委ねる。まずは目的と方法を自分たちで決定させた。学生たちは始めはどうしたらいいかわからず佇んでいるものの、毎週の話し合いを重ねるにつれ、自ずと役割を引き受け始める。さらに、ただの話し合いではなく、「平和的」な話し合いを模索し始める。

「休んでしまった人、あまり意見を言わなかった人の意見が反映されないで決定してしまったのが残念だった。平和的に物事を決めるのは難しい…。」

多数決では少数意見を切り捨ててしまうことになるが、全ての人が納得いくような結果に持っていくにはどうしたらいいか、発言する人がしやすいようにするには聞く側が発言に対して少しくなづくだけでも違うのではないかと等々、学期前半部の講義での学びやグループワークでのトレーニングを実際にどう活用・実現したらいいか考え始めるのである。学期の終わりが近づくにつれ、以下のような感想が書かれた。

「話し合いは前回よりも楽しい雰囲気の中でできたと思う。みんなが最後には笑顔になっていた。クラスの中に平和な時間が流れたのではないかと思った。」

「自分の意見を言えるこの教室は、平和です。」

プロジェクトまでの過程を通して、各々の中で平和をつくる実践者としての意識が芽生え、課題を見つけ、また、平和をつくることを実感できていることが確認できる。

プロジェクト前の最後の授業である12週目には、「平和教育」に立ち返る。「平和教育」というこの4文字に

隠れている言葉、省略されている言葉は何だろうか？という設問を投げかけた。学生からの回答は【資料2】の通りである。1週目に挙げられた【資料1】③の「平和教育」から大きく変化していることが読み取れる。すなわち、前向きで主体的、そして動的なものを指すようになっている。そして、一つの型にはまった「平和教育」ではなく、学生自身が暴力・対立・平和について3ヶ月間考えながら、自問自答し、個々に導き出した「平和教育」が表現されている。

4 成果と今後の課題

本授業では、「平和の文化を教えるための実践的教育としての平和教育」を授業像として掲げ、それを通して「平和をつくる実践者」として学生を育成することを目指した。

学生は、平和をより具体的に自分に密着した出来事として捉え始め、暴力の理解・対立の解決・平和の価値の発信といった平和をつくるための知識・技術・態度を備えた、平和を実現する主体者としての成長が見られた。

今後の課題としては2点が挙げられる。

まずは、本学のカリキュラムに関してである。平和と紛争学を教える授業は他にないため、学生は「総合演習Ⅱ」の2年次後期になって初めて学ぶこととなる。広範囲にわたる領域を扱い、講義からプロジェクト発表までの全てを半期で行わなくてはならず、一つ一つのテーマに深く踏み込むことができていないことは否めない。

2点目として、平和学は、平和という価値を追求するという点では中立ではない。それは岡本三夫の言葉を借りれば、医学が健康という価値に基づき、法学が正義という価値に基づくのと同じである。⁹しかし、教員は平和の価値の刷り込みにならないよう常に注意しておかなければいけない。

平和は学際的な主題である。社会や道德の教科に限られているわけではない。これから多様な形で平和をつくる試みを一教員として、そして一個人として考えていきたい。

*最後に、本授業を一緒に作り上げ、暴力・対立・平和に対する私の考えを深めさせてくれた3年間の全ての受講学生に感謝の意を表したい。

【資料1】「3つの窓でこんにちは」のうちの質問②③

質問②：受講理由/この授業で何を学びたいか。

●授業内容

- ・「平和」という大きなテーマに対してどういったものが「平和」と呼ぶことができるのかを学びたい。
- ・「対立・暴力・平和」に興味を持ったから。勉強したいと思った。
- ・平和について考えたいからです。
- ・授業の内容が良かったから。平和の大切さを学びたいです。
- ・「暴力」「平和」について興味を持ったからです。
- ・「対立」と「暴力」と「平和」のテーマに興味を持ったため。普段あまり考えることではなかったのでもいい機会だと思った。
- ・「平和」について深く学びたいと思ったからです。
- ・平和や暴力について学びたいと思ったからです。
- ・平和教育を学びたい。どうしたら平和になるのかを知りたい。
- ・平和とは何か具体的に学びたい。
- ・平和について学びみんなで平和な世界を考えたいです。
- ・授業要項を見て、一番何を授業で取り上げるのかが分かりやすかったからです。

●授業形態

- ・ディスカッションの授業が面白そうだと思います。
本当の平和ってなんだろう？
- ・ディスカッションを通して自分以外の人の良い意見を聞いてみたい。

●自己成長

- ・将来に役立つと思ったから。平和という意味や大切なことを学びたい。
- ・集団行動を学びたいです。
- ・「平和」とは何か。そんな大人な問題に真っ向からハッキリ自分の意見を言えるように大人な自分になりたい。

●担当教員で決めた。

●友人に誘われたため。

質問③：小学生・中学生・高校生の時に（自分が思う）「平和教育」というものを受けたことがあるか。あるなら、どういうものであったか。何を学んだか。

●修学旅行

*沖縄

- ・修学旅行で沖縄に行ったとき、戦争のことを学びました。
- ・高校で沖縄に行って戦争の話を聞いた。
- ・修学旅行で沖縄に行き、戦争について勉強した。
- ・高校の時沖縄へ修学旅行に行く前に沖縄戦について学びました。
- ・中学校の修学旅行で広島に行きました。高校でも沖縄へ。

*長崎

- ・高2の時に長崎に修学旅行に行き、原爆について学び、平和の大切さも伝えられました。
- ・高校の修学旅行に行ったときに長崎の平和記念公園（ママ）に行ったり戦争でなくなった人の手紙とか置いてある所に見学に行ったこと。
- ・修学旅行で長崎の平和の像を見たり、戦争の話を聞きました。
- ・高2のとき長崎に行きました。

●授業一般

- ・私は「平和」という言葉が授業に出てくるのは、歴史の授業のイメージがあります。戦争について学び、関係のない人を巻き込んだり、ちょっとした食い違いで起こる。戦争を起こさない為にも、平和であることの大切さを学んだ。
- ・小学校の授業で世界平和について学びました。
- ・長崎について学びました。

●授業教材

- ・中学校のときに「プロジェクトX」という番組を授業で見ました。内容は、「世界平和について」でした。
- ・受けていない、ことはありません。小学校の時「はだしのゲン」を見ました。長崎に行って防空壕を見してきました。
- ・授業で戦争などのビデオを見たり、本を読んだりしました。
- ・中学のときに戦争のことを学びました。「貝になりたい」
- ・中学校のときに「はだしのゲン」を読みました。

●個人的に

- ・おじいちゃん、おばあちゃんから昔のことを聞いた。靖国のことなど。
- ・戦争の話を聞いた。学校ではなく個人でTV番組を見た。
- ・けんかをした時先生に殴られて平和について考えた。

●覚えてない

- ・覚えてないと思う…。大学のときのゼミでは、靖国神社に行った。
- ・わかりません。覚えてません。
- ・覚えてません。
- ・ないです。

【資料2】

「平和教育」というこの4文字に隠れている言葉、省略されている言葉は何であろうか？

- ・「平和なんだなあ教育」昔の戦争などの歴史や、原爆や空襲などの体験を聞いて、今この時代、自分たちのいるこの時代がいかに平和であるかを考えると同時に、この今ある平和をどうつなげていくかを考える教育のことなのかな？と思った。だから僕たちの平和活動も、前を向いたものでありたいと思う。
- ・「平和について考えることができるようになるための教育」戦争や暴力を知り、なにが平和なのか考えたり、どのようにしたら平和につながることができるのかを考えることが平和教育だと思ったから。
- ・「平和未来教育」これから平和になれるようにするため
- ・「平和推進教育」これからもっとどんどん平和にしていこう。現状維持ではなくて。
- ・「平和育成教育」平和をつくる教育
- ・「平和だったら教育」妄想、想像する、じっくり考える、自分の中で考える時間を大切にする。
- ・「平和ニコニコ教育」皆がニコニコしていることが平和であり、心地よい、から始まる。
- ・「平和です教育」今平和だから、平和について教えるのではなく、教育を受けられることこそが平和である。
- ・「平和というものを教わりながら、自らも考え、自分の生き方を育成していく」平和って自分で知るだけでは限界があると思う。体験者や様々な人（自分

以外の）からの考えや話を聞き、それについて自分で感じたことや考えたこととして、自分の知識にしていく。そのような体験から、自分の生き方が変わっていくと思う。影響力は必ずある。だから、自己を育成していくのではないかと思う。

- 1 「紛争」、「対立」とともに英語の「conflict」の訳語である。「conflict」は2つ以上のゴール、目標が両立、共存しない状況を表し、日本語訳では葛藤から対立、紛争とその「conflict」の状態が個人内か、個人間か、集団間かで様々な訳語が当てられている。本授業では「conflict」の多様性を踏まえた上で「対立」という言葉を使用した。しかし「peace and conflict studies」の日本語訳は「平和と紛争学」という訳語が普及していることから、本稿ではこのケースにおいては「紛争」という訳語を用いている。
- 2 吉田康彦編著、『21世紀の平和学』、明石書店、p.18、2004
- 3 竹内久顕、「日本の平和教育の蓄積と課題」日本平和学会2008年度秋季研究集会発表、2008年11月23日
- 4 平和の文化をきずく会編、『暴力の文化から平和の文化へ—21世紀への国連・ユネスコ提言—』、平和文化、p.12、2000
- 5 Hague Appeal for Peace. The Hague Agenda for Peace and Justice for the 21st Century.
<http://www.haguepeace.org/resources/HagueAgendaPeace+Justice4The21stCentury.pdf>
- 6 吉田康彦編著、『21世紀の平和学』、明石書店、p.25、2004
- 7 アリシア・カベスード、「平和の文化とデモクラシー」、平和と非暴力の文化に関する国際セミナー、2007年5月3日、5月4日
- 8 下鴨哲朗、『平和は「退屈」ですか 元ひめゆり学徒と若者たちの500日』、岩波書店、p.13、p.15、2006
- 9 吉田康彦編著、『21世紀の平和学』、明石書店、p.18、2004